



第61回 日本手外科学会学術集会
ランチョンセミナー15



手外科診療における

Utilization of Musculoskeletal Ultrasonography in Hand Clinic.

運動器エコーの活用

日時：2018年4月27日(金) 12:00～13:00

会場：第6会場（京王プラザホテル 南館4階 錦）

座長：金谷 文則 先生
(琉球大学 整形外科 教授)

演者：仲西 康顕 先生
(奈良県立医科大学 整形外科・臨床研修センター)

《認定単位》

- ・日本整形外科学会 専門医資格継続単位 1 単位
[1] 整形外科基礎科学 [10] 手関節・手疾患(外傷を含む)
- ・日本手外科学会 専門医単位 1 単位

※1単位につき1,000円を受講料が必要となります。

共催：第61回日本手外科学会学術集会
日本シグマックス株式会社 / 株式会社日立製作所

手外科診療における

Utilization of Musculoskeletal Ultrasonography in Hand Clinic.

運動器エコーの活用

—— 奈良県立医科大学 整形外科・臨床研修センター 仲西 康顕

超音波診断装置は、他の画像診断装置であるX線写真やCT、MRIとはかなり異なった特徴を持つ。どの部位を観察した画像なのかを保存された静止画像から読み取るとはX線写真のように容易ではなく、CTやMRIのように体の深部まで観察することは難しい。さらにCTやMRIと決定的に異なり、プローブの方向と線維の走行との関係によって超音波の反射の強さが変化するため、同部位であっても組織の見た目が大きく変化することがある。これらの特徴のため、再現性のある定量的なデータを得ることには多くの困難がつかまとう。末梢神経の観察にも超音波は極めて有用であるが、静止画像で示すことのできる情報は限られており、プローブを連続的に動かすことで初めて見えてくる所見が実際には多い。

一方で、手の外科の診療における超音波診断装置の役割は多岐にわたる。それは診察室で運動器の動態を評価し、直ちに診断に至る画像を得ることのできる画像診断装置であり、患者に病態を説明するのに有用な情報提供のツールでもある。外来診療では正確な注射を可能とし、手術の際には確実な伝達麻酔を行うための機材となる。低侵襲の手術を可能とする器具であり、術後疼痛を抑制しながらリハビリを行うための末梢神経カテーテルを留置する手段にもなりうる。手の診療を行う際、軟部組織をリアルタイムで観察する新たな「目」を医師が手に入れることは、様々な活用法により診療の幅を広くすることにつながる。

たしかに、超音波プローブを手にしても、すぐに理想的な画像を得られる訳ではない。超音波の性質を知り工夫することによって、超音波診断装置はより良く使いこなすことができる。手外科診療での超音波の活用のための我々のこれまでの取り組みの実際と、臨床で生かすことのできるテクニックについて紹介する。

<仲西 康顕 先生 ご略歴>

2002年 奈良県立医科大学卒業・整形外科教室入局

2011年 奈良県立医科大学整形外科 大学院入学

2015年 奈良県立医科大学 臨床研修センター 副センター長

【主な所属学会】日本整形外科学会、日本手外科学会、日本整形外科超音波学会、日本区域麻酔学会

【専門領域】手の外科、運動器超音波診療、区域麻酔（伝達麻酔）

【著書】うまくい！超音波でさがす末梢神経（2015年 メジカルビュー社）